

日本におけるフェデリコ・ガルシア・ロルカの受容



国際言語文化学科 **森 直香**

● 連絡先 E-Mail : naokamori@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

スペイン文学, 比較文学, 受容研究,
フェデリコ・ガルシア・ロルカ



本研究は、スペインの詩人・劇作家フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898~1936)の作品の日本における受容についての初めての体系的な研究である。彼の作品はセルバンテスと並んで世界中で愛読されているが、日本における受容についての細かい検討は行われていない。本研究ではロルカ作品の受容を概観した上で、当時の書評・劇評・論文等を参考にしながら日本人読者が何を期待して作品を読み、どのような点を評価しているかを考察し、受容を推進した要因を明らかにすることを目的とする。このような分析は作品の本質を明らかにするだけでなく、外国文学の紹介・翻訳のあるべき姿を探ることにもつながり、文化の発信について考える上でも有益である。

本研究では、戯曲を中心にロルカ作品の日本での受容の過程を検討し、以下の4点に焦点を当てて受容を推し進めた要因を明らかにする。

1) ロルカ作品の受容に影響を及ぼした要因

日本においてロルカの作品の受容が本格化するのには第二次世界大戦後のことである。ロルカの受容がなぜ1950年代に急激に進んだのか、受容を推し進めた要因を考察する。

2) 日本人読者の解釈・評価

ロルカの作品は、1950年代に本格的に紹介されると、三島由紀夫、安部公房らの文豪を含む多くの読者を惹きつけた。日本人読者が作品にどのような評価を下したかを考察し、日本でも広く読まれている理由を探る。その理由としては3) 4)に挙げる作品の普遍性、日本文化とロルカの世界観の共通点にあるのではないかという仮説を立てているが、考察を通じてそれを実証する。

3) ロルカ作品の普遍性

ロルカ作品の普遍性は、戯曲の場合、①テーマの普遍性と②俳優の動きと台詞から舞台装置に至るまでの様式化によると考えられる。様式化とは、対象をそのまま描写するのではなく、単純化・類型化して表現する技法で、能・文楽・歌舞伎に多く見られる。ロルカ戯曲では、俳優の台詞・動きから舞台装置に至るまで様式化が見られるが、様式化はどの時代のどの場所にも適用可能な普遍性を作品に与える。

4) ロルカ作品の世界観と日本文化の共通点

ロルカ作品が日本で愛されている理由はいくつか挙げられるが、その中に独特のキリスト教解釈とキリスト教以前の世界に属する原始的かつ汎神論的とも言える世界観があり、特に三大悲劇に色濃く表れている。